

いわき人といわきの発展

人間を大切に育てる環境作りを

東日本国際大学経済情報学部 准教授 山田 紀浩

1970年代、各家庭の玄関先の表札には名前の前に住所まで書かれていた。ところでいわき市の合併は昭和41年(1966年)である。私の家は勿来地区であったが、合併後はもちろんいわき市となり表札の住所も書き換えられた。ただ門構えが立派なある家は表札も石で彫られていたために、合併10年後にも勿来市の住所が刻まれていた。私はいわき市の合併について、生まれてはいたが全くわからない。しかしその石の表札の住所に不思議な感覚を持ったことははっきり覚えている。

話は変わるが、韓国のある地方大学で5年間教鞭を執っていた時のことである。その頃はまだ韓流ブームもなく、地方都市で日本人に会うことは滅多になかった。そんなある日、一人の日本人旅行者に出会った。日本人に会うだけでも何と無くうれしかったが、その人は四倉の人だった。勿来と四倉は同じいわき市内でも、買い物や遊びに行こうとなると両地域ともに「遠いな」という感覚を持つ。しかしその時は全く違っていた。まるで親戚に出会ったようにうれしかった。ここでできることならば何でも手伝ってあげたい感情に駆られた。ただいわきの人間というだけでうれしかった。

最近いわき出身で活躍している人にWBC代表の小松投手や箱根駅伝の柏原選手などが挙げられよう。一度も会ったこともないのに応援したくなる。また世界的な指揮者である小林研一郎の活躍にはただただ敬服し、芸能界ではいわき市南部地区出身の人気女優はそろ

そろ身を固めないのと余計なことを心配し、いわき市縁の某大物女優には大学院での研究報告に期待をしてしまう。この他にも知名度はともかく、いわき出身で頑張っている人に出会えば、誇らしく思うと同時にこちらも頑張ろうという気になる。同郷の人間の活躍は少なからずその地域の人間にも影響を及ぼすようだ。

ところで大学の授業で、「この社会を良くするも悪くするも人間のなす業だ」という話しをすることがある。“この社会”を“いわき”に置き換えると「いわきを良くするも悪くするもいわき人のなす業だ」ということになる。社会は人間が作り上げてきたものであり、このいわきもやはりいわき人が築き上げてきたものである。そしてこれから私たちが創っていかねばならぬものである。もちろん地域社会も国家情勢そして世界情勢の影響を受ける。しかし日本には当たり前のようであるが、地方自治制度という数千年の歴史と犠牲をかけて人類が作り上げてきた民主制度の型がある。背景や内容はともかく、今のいわき市の形、すなわち合併を含めた行政区域の改編や制度の改変もこの枠の中で行なわれてきた。つまりいわきの社会を創る底辺には必ずいわき人がおり、いわき社会の発展にはいわき人の発展なしにはありえないということだ。

しかしいわき出身で有能な人間はあちこちにいるのに、いわきの発展はなぜ停滞気味なのだろうか。大学の端っこにある研究室で、友とひそひそ話すことがある。雑談の中にヒントやアイデアがありその時間はまたそれで有意義だ。その中に出てくるキーワードにやはり「ひと」は欠かせないようだ。

本学のある野球部学生の話である。リトルリーグまではいわきは強豪である。しかし甲子園には行けないので出場できる栃木の高校に入り甲子園に出場した。大学では大学野球の甲子園である神宮大会の常連校がいわきにあるので戻ってきたという。こういう学生が何人かいる。確かに夏の県予選ではいわき地区の高校を一生懸命応援しているのだが、ここ

何年も甲子園に行っていない。しかしいわき人は甲子園に出場している。こういう話は野球ばかりではないようだ。

スポーツにしろ勉学にしろ 15 才の若者が親元を離れ大志を抱き努力することは頼もしい限りだ。ただいわきで人を育てる環境作りは急務ではなかろうか。しかしその場合何よりも人間を大切にすることは根っこに置かなければならないだろう。政策科学の父といわれるラスエルは、「政策の究極目的は人間の尊厳性を表現すること」と言っている。政治、行政、経済、教育等、社会すべての根底にはあらゆる年代層の人間がいる。社会の中心人物である人間を大切に活用してこそ社会の発展がある。これからの誇れるいわきの発展のために、人を大切にいわき人の意見が反映された形を検討することを、片隅に置いてほしい。